日本IT書紀

002 書紀

01 序叙

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第二

書　紀

一

本書の名は『日本書紀』に由来している。

それで、少しく『日本書紀』という書物について書く。

そもそも論で恐縮なのだが、「書紀」というのはどうやら〝珍妙〟な書名であるらしい。中国の史書は紀伝体を「書」、「編年体を「紀」と表記する。その両方を意味する「書紀」は不自然で、後続の官選史書「続日本紀」「日本後紀」からすると、「日本紀」が本来の書名だったという。

撰上されたのは、氷高女王（諡して「元正」）の養老四年（七二〇）五月である。廣野（持統）、阿閇（元明）、氷高の三女王が統治した三十余年は、大海人＝珂瑠の王統を首王につなぐ役目をしたように思われているが、事蹟を見ればその指摘は当たらないことがわかる。

百済戦役（六六〇～六六三）で大唐帝国による占領は免れたものの、外交と交易は決定的に冷え込んでいた。それを快復し、対外的な王統の称号を「日本」に改め、律令を交付した。だけでなく城壁を備えた坊条の定都を建造し、國名を定めた。年籍を作り度量衡を定め通貨を鋳た。

大海人大王（諡して「天武」）の治世十年（六八一）三月条にある

令記定帝紀及上古諸事

帝紀及び上古の諸事を定め記すことを令す

を起点とすれば、四十年越しの大事業だった。

編纂にかかわったのは数十人あるいは数百人であったろうし、その作業は一度でなく何回かに分けて――おそらく前後十程度の区分で――行われたことが分かっている。だが記録に残るのは王族筆頭・舎人王の名前でしかない。

総巻数は全三十巻、系図一巻。

おそらく特上の絹布に練りに練った漆墨を以て、ひと文字ひと文字に精魂を込め、深緑の緞子で装丁を施し、金糸を以て龍雲を綾取った。わが国最古の官撰国史とされる。

なぜこの時期に大和王権が公式な歴史書を編んだかについては、官僚型中央集権を確立するためであると説明される。それは対中貿易、なかんずく大唐帝国との交易を通じて入手した情報に依っていた。その前史として、額田

部女王のとき、対隋交易に際して編まれた『国記』『天皇記』『臣連伴造国造百八十部并公民等本記』があったとされる。

もう一つ不思議なのは、この書物の存在が朝廷宮人に広く知られたのは、編纂直後にお披露目した養老五年（七二一）からおよそ一世紀後、弘仁四年（八一三）だったということである。長く秘された理由は詳らかではない。

筆者は「日本」王統が、神の意向で地上を支配していることを対外的に示す目的で編纂されたと考えている。対外的に、とはすなわち大唐帝國に対してであって、七〇一年の第八次遣唐執節使・粟田真人が「大宝律令」を中国皇帝に献上したように、献上し披露するために編纂したということだ。

何となれば、倭国は百済戦役に大敗し、大唐帝国の軍政支配を受け、筑紫の総帥だった大海人王が近江王家を滅ぼして唐化を進めてきた。律令を定め、王侯貴族の分限を定め、王都を定め、元号を定め、貨幣を鋳した。

その集大成として国史があった。当初は粟田真人による国交回復のとき「大宝律令」とともに大唐帝国皇帝に献上されるべきところ、武則天の「周」が興った。再度の組み替えを行ったために、当初予定より完成が二十年遅れたのかもしれない。

ともあれ、本来あるべき「序文」と系図一巻は、一千三百年の時空に散逸した。考えてみれば、この湿度の高い風土で一千三百年近くも前の書物が残るというようなことは、まず奇跡に近い。そうでなくとも奈良、京都は幾度も戦火に遭った。

二

宋・太宗の雍熙元年（九八四）のこと、久しく往来が絶えていた日本から、藤原一族の奇然という東大寺の学僧が海を渡り、中国の宋王朝に朝貢した。そのとき献じた品々中に『王年代記』という書物がある。

この『王年代記』こそが散逸して現存しない『日本書紀』系図の痕跡を伝えると考える向きもある。しかし漢字二文字の天皇名（漢風諡号）は、淡海三船（七二二～七八五）が定めたとされるほど後世の作になるものであって、『書紀』本文には全く使用されていない。

それゆえに『王年代記』が『書紀』系図写本であるとするのには困難がある。神代に登場する神々の名が『書紀』諸本と一致していないことも、その説を否定する根拠となる。

ただし『王年代記』には神武までの歴代が筑紫城に居し

ていたなど独自の記事を含んでいる。平安中期にいたっても天皇系図は一定せず、諸種の異伝があった、と考えることができる。

現存のものはすべて後世の写筆本であって、「卜部兼方本」と呼ばれる神代紀二巻が弘安九年（一二八八）の奥書を持っていて最も古い。

次いで永和元年（一三七五）の奥書を持つ「熱田本」十四巻、応永四年（一三九七）の奥書を持つ「卜部兼右本」二十八巻などが知られ、三十巻を通しで備えるのは慶長年間（一五九六～一六一五）の写筆と見られる「内閣文庫」十冊である。江戸期に市販された木版古活字刷本の多くは、慶長十五年（一六一〇）起版に基づいている。

このほか数行、数十文字のみを残す断簡が伝えられ、それぞれに比較検討が行われている。研究者たちは膨大な古紙の中から十行二百三十七文字、あるいは三行五十九文字を残す断簡を見つけ出し、それぞれの筆法、用紙、紙背、異字の有無を検証する作業を積み重ねた。

その結果、空海の詩文集『遍照発輝性霊集』（性霊集）の一部を背紙に持つ巻之第十「応神紀」残巻が平安初期の写筆と断定され、これが国宝に指定されている。

第二次大戦の前まで、『日本書紀』や『古事記』は神道の経典のように扱われ、事実、神官にとってたいせつな素養の一つだった。原文に触れることができるのは一部の研究者と好事家に限られていた。

学会の一部で、他の学術分野や在野の研究家にも広く知らしめるべきである、という主張がなかったわけではなかった。だが、他の学術分野の専門家の意見は参考程度に過ぎない、と壟断した。

学際研究が本格化したのは最近のことである。専門家の自負といえば聞こえはいいが、自負は偏見に通じる。師弟関係を優先させる自家中毒といっていい。「由らしむべし・知らしむべからず」を確実にするには、原文が容易に手に入らないようにすればいい。囲い込むことで権威を守り、秘密化することで権威を不可侵にすることができる。

ただ、弁護の余地がないでもない。

当時、活字は高価であって、一方、『日本書紀』のような古文書の出版は大きな需要が見込めなかった。『国史大系』の名で吉川弘文館が出版に踏み切ったのは一九三四年（昭和九）だった。

太平洋戦争に勝利した連合国軍ないしアメリカ軍は、日本を占領統治するに当たって日本神話に結びつく原典、論文の類を皇国史観の元凶として出版を差し止め、また革新を自認する出版社はあえて手を出そうとしなかった。こ

のため『書紀』は、教科書にその名と一部が紹介されるだけの、まるで鵺（ぬえ）のような存在になってしまった。

こうした状況のなかで、一九六七年（昭和六十二）三月、岩波書店から普及版である岩波古典文学大系『日本書紀』が刊行された。

底本は卜部兼方本神代紀二巻と卜部兼右本二十八巻、校注は坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、監修は高木市之助、西尾實、久松潜一、麻生磯次、時枝誠記である。

上下巻合わせて一千三百ページを超えるのは、原文と読み下しを併記しているだけでなく、随所に脚注を施し、〔補注〕で諸種の考察を展開しているためである。

三

社会人になるかならぬかのころ、どういう弾みだったのか今では定かではないけれども、これを購入してあった。上・下巻合わせて四千円というのは、大卒の初任給が七万円前後だった当時、決して安くはなかった。それが書架でほこりを被っていた。

ちなみにインターネットで中古本販売サイトにアクセスしたところ、上巻が六千円、下巻が五千八百円だという。三十余年で三倍というのが妥当かどうかは分からないが、いまだに需要があるということであろう。

書棚から引き出したのは数年前である。

あることを思いついた。

それというのは、「日本」という文言が何回、どの巻に、どのようなときに使われているか、ということだった。ごく素朴に、この国はいつから「日本」なのか、その正しい読みは「ニッポン」がなのか「ニホン」なのか、と疑問に思ったのがきっかけだった。「日本」の文字を冠した最も古い歴史の書であれば、どこかにその由来が示されているに違いない。

そのような目的のために全巻を眺めるのは、読むという行為から大きく外れている。

せっかくの機会なので一端を紹介する。

その巻第一「神代上（かみよのかみ）」の第一段は以下のようである。

古・天地未剖陰陽不分・渾沌如鶏子溟涬而含牙・及其清陽者薄靡而爲天・重濁者淹滞・而爲地精妙之合摶易・重濁之凝竭難

故・天先成而地後定・然後神聖生其中・焉故曰開闢之初洲壤浮漂・譬猶游魚之浮水上也・于時天地之中生一物・状如葦牙便化爲神

【読み下し】

古（いにし）へ天地（あめつち）未（いまだ）剖（わか）れず、陰陽（めを）分かれざりしとき、渾沌（まろか）れたること鶏子（とりのこ）の如くして、溟涬（ほのか）に牙（きざし）を含めり。其れ清陽（すみあきらか）なる者は薄靡（たなび）きて天と爲り、重　く濁れる者は淹滞（つつ）いて地と爲るに及びて、精（くは）しく妙なるが合へるは搏（むらが）り易く、重く濁れるが凝りたるは竭（かたまり）り難し。

故、天が先づ成りて而して地が後に定まる。然して後、神聖（かみ）、其の中に生（あ）れます。故曰はく開闢（あめつちひら）くる初めに、洲壌（くにつち）の浮れ漂へること、譬へば游魚（あそぶいを）の水上に浮かけるが猶（ごと）し。于時（とき）に天地の　中に一物生（な）れり。状は葦牙の如し。便（すなは）　ち神と化為（な）る。

これを見ると、だれでもが身構える。国文学か中国文学ないし仏教を専攻した人、中国と取引きをしている人ならともかく、これほどの漢字の羅列に出会うことは、日常、まずない。

修飾を外して現代文に訳すと、「太古の昔、天と地がいまだ分かれず、陽と陰すら定かでなかったとき、ニワトリの卵を掻き回したような混沌とした中に、わずかながら兆しが見え始めた」となる。

個々の解釈は、とりあえず度外視していい。

全体を見たとき、五文字のフレーズが多いことに気がつく。中国の詩文の形式を踏んでいるのに違いない。これがもととなって、倭語（原日本語）の一音に漢字一文字を当てる表現形式、すなわち「万葉仮名」が生れていく。倭語の詩文をもって擬似的な漢詩を作る作法が仮名を発明した。

この列島における漢字は、最初は中国大陸や朝鮮半島から渡来した識字者の特殊な専門技術であり、それを使うことができるのは王者にほかならなかった。中国華北の言葉が流れ込んできた三世紀まで、「邪馬台国」の女王・卑弥呼が漢字を解したかどうかは別として、この列島の王者にとって、漢字は意匠化された図形に過ぎなかった。

中国江南の音が主流となった五世紀のころ、王の近くに仕える人々はようやくその意味を理解した。この時点で権力中枢は自己の意思を表わす手段を得た。ただしそれは借り物に過ぎず、文字を自由に操れるということが、特殊技能ですらあった。

一方、中国の言葉も長い歴史の中で変化した。

五胡十六国が興亡する中で、漢民族が大いに驚きかつ怖れたのは、あろうことか胡族が学問をし、芸術を創出したことだった。日本の中宮寺や広隆寺に残る弥勒半苛思惟像の源は、「拓跋魏」（北魏）と呼ばれた蛮夷の帝国からもたらされた。そのたびに文字を知る階層は着実に裾野を広げた。

そのことに最も大きく貢献したのは経典であろう。

最初、経典は北魏から高麗王国にもたらされ、百済王国を経てこの列島に入ってきた。次に大陸に統一帝国が誕生するに及んで、より洗練された唐の音が東北アジア地域の標準となった。八世紀にいたって、この列島の人々は万葉仮名で初めて「表現」を獲得した。漢字は権力の道具でなく、教養になった。

日本語は七世紀から八世紀にかけて、律令制とともに人工的に作られた、とする説は、このことを言っている。唐初、知識人の知識人たる所以である五言七言律詩の音韻に、大和の言葉を当てはめた。事実、のちの和歌、短歌、都都逸、俳句、ひいては駅や街中に貼られているポスターの標語など、日本語の基調はすべてここから発した。

「神代」上初段は漢字の一々にルビを振らなければ、容易に読みこなせない。といってルビだらけでは、スムーズに読み進むことができない。まして「溟涬」「薄靡」「淹滞」「洲壤」など、見なれない熟語が登場し、独特の訓が当てられている。

たいていの人はこれでへこたれる。

四

『日本書紀』の読み下しは、平安初期の弘仁年間（八一〇～八二四）に固まったとされる。大和平城から山背国乙訓（京都盆地）の地に遷都したのをおりに、位階を襲うべき中央貴族子弟の教養として同書が講義された。

底流には、平安京に即位しながら自ら「平城」を号した天皇が登場したように、温故知新ないし保守回帰の風潮があった。そのとき学寮教授であった多人長という人が、ことさらに難解な訓読を振った。漢籍、詩歌、古韻に通じた博識であったには違いないが、権威主義的で保守的、かつ自家中心的な人物であったのかもしれない。

文学史ないし言語史の観点で『日本書紀』は、「大和言葉」の発生過程を探るうえで非常に興味深い。原日本語が人々の記憶から忘れ去られ（あるいは意図的に消し去られ）、五言・七言の漢文が難解であったので、このような独特の訓読が割り当てられた。つまるところ新しい言語

体系を創出したようなものだった。

現存する『日本書紀』の写本（「ト部家本」「熱田本」「伊勢本」「北野本」など）のすべてに、訓読の仕方を教示した痕跡が残っている。幕末維新の開明者が、西洋からもたらされた書物にカタカナのルビを振ったように、平安・鎌倉の人々にとって原日本語は外国語に等しかった。

本文の脇に万葉仮名で振った訓読が、写筆を重ねる中に本文に取り込まれた。それによってわたしたちは八世紀ないし九世紀の人々がどのように読み下していたのか、さらに当時の発音はどうであったのかを知ることができるのだが、原文にあった脚注なのか、後世に入り込んだ補注なのか、ところどころ判然としない。

岩波古典大系は、その補注「天地剖判の神話」で

未剖は准南子、俶真訓の「天地未剖、陰陽不判、四時未分、万生未生」（高誘注「剖判、混分」による）。渾沌如鶏子、暝滓而含牙芸分類聚（天部）引用の三五歴紀に天地渾沌如鶏子」、太平御覧（天部）引用の三五歴紀に「渾沌状如鶏子」とある。溟滓は自然の気。溟はほのかで暗く、よく見えぬさま。滓は音ケイ。水の様子。別訓ククモリテは、ほのかに香などのこもったさま。牙は芽に通じて、キザシの意。太平御覧（天部）引用の三五歴紀の原文には「溟滓始牙、濠鴻滋萌」とあって、溟滓（白然の気）が始めて芽（きざ）したの意と解される。

と解説している。

「解説そのものが、さっぱり分からん」

という感想は、事実、正しい。

ただ留意すべきは漢字の使い分けである。一つのものが複数になるという意彙を持つ漢字として、わたしたちは普通、「分」「別」「解」のいずれかを使う。ところが『日本書紀』の編者――というより正しくは『准南子』の著者――はここで、剖と分とを巧みに使い分けている。

剖は剃刀の刃が気がつかぬほど薄く切り裂く映像をイメージさせ、分は離別の意味を示す。これこそ、中国の人が多種多様な漢字を生み出した理由なのである。一字褒貶の思想が、五万に近い文字の種類を生み出した。

それにしても「溟滓に牙を含めり」とは何と文学的であることか。

～～～～　補　注　～～～～

「書紀」という書名　中国の史書は紀伝体を「書」、「編年体を「紀」と表記する。その両方を意味する「書紀」は不自然で、後続の官選史書「続日本紀」「日本後紀」からすると、「日本紀」が本来の書名だったと考えられている。

氷高女王　ひだか／日本根子高瑞浄足姫天皇／６８０～７４８。草壁王と阿閇女王（日本根子天津御代豊国成姫：元明天皇）の間に生まれ、第四十四代元正天皇（在位７１５～７２４）なった。諸伝によると、推古、皇極（斉明）、持統、元明の女性天皇四人は夫大王の死後、大王位を預かるかたちで即位したが、日高女王は非婚のまま大王になった唯一の存在だった。

七二〇／養老四年の出来事

【天皇】氷高女王（元正）【執政】藤原不比等

・靺鞨国に使者を派遣

・大隅隼人が反乱、大伴旅人を征隼人持節将軍に任命

・『日本紀』三十巻、系図一巻を撰上

・藤原不比等没

・舎人親王を知太政大臣に任命

・蝦夷が反乱、多治比県守を持節征夷将軍に任命

舎人王　とねり／６７６～７３５。大海人大王（天武）の第六王子として生まれたが、生母が葛城大王（中大兄、天智）の王女だったことから大王位に就くことはなかった。知太政官事として、右大臣・長屋王と王統直截政権を担った。のちにその第七皇子（大炊王）が天皇となったとき、追諡して「崇道」天皇、「尽敬」天皇とも。

奮然　ちょうねん／９３８～１０１６。『宋史』列伝巻第二百五十【外國七】日本國条に「雍熙元年、日本國僧奮然與其徒五六人浮海而至、獻銅器十餘事、并本國職員今、王年代紀各一卷。奮然衣綠、自云姓藤原氏、父為真連：真連、其國五品官也」とある。

鵺　ぬえ／闇夜に気味の悪い声で鳴く未確認生物（妖怪）。顔は猿、胴体は狸、手足は虎、尻尾は蛇の姿で描かれている。鳴き声から「夜鳥」とも表記される。

卜部兼方　生没年未詳。鎌倉時代中期、平野神社（京都市北区）の神官だった。一二八〇～一三〇〇年ごろ、『日本書紀』の解釈をまとめた『釈日本紀』全二十八巻を著した。「卜部」は古代王権の中にあって焼いた亀甲に現れる亀裂から吉凶を占うことを仕事とした品部のこと。

卜部兼右　うらべ・かねみぎ／１５１６～１５７３。卜部家二十四代、吉田家八代の当主。

中国華北の言葉　漢時代の中国宮廷語。その発音は「上古音」と称される。日本列島の王権は朝鮮半島経由で中国王朝と交渉したため、華北訛りが入った上古音が流入した。「行」を〔ギョウ〕と発音するのは上古音である。

中国江南の音　南北時代の南朝の中国宮廷語。「中古音」。晋が滅びたあと、華北が五胡十六国の興亡を繰り返し、隋が全土を統一するまで（四～六世紀）、日本列島の王権は中国江南の王朝と関係を持った。中古音では「行」を〔コウ〕と発音する。また江南地方特有の音（訛り）も入ってきた。「梅」を〔メイ〕、「馬」を〔マ〕と発音する類である。

唐の音　隋が中国全土を統一し唐が栄えた七世紀から十世紀にか

けて、長安で使われた標準語。華北音と江南音が融合し、初めて統一的な発音が成立した。わが国には遣唐使に随行した学生たちがもたらした。「行」を〔アン〕と発音するのは唐音である。

平城天皇　へいぜいてんのう／７７４～８２４。桓武天皇の第一王子。小殿王。第五十一代天皇。和風諡号は「日本根子天推国高彦」。嵯峨天皇に譲位して上皇となり、平城旧都に移り住んだ。

多　人長　おおの・ひとなが／生没年未詳。『古事記』を編纂した太安万侶の子孫で、貴族階級の子弟に大和王権の歴史を教えた。弘仁四年（八一三）日本紀講筵を取り仕切った。大同三年（八〇八）従五位下に叙せられた。

淮南子　淮南王・劉安（前１７９～前１２２、前漢・高祖の第七王子・劉長の長男）が学者たちにまとめさせた。俶真訓はその第二巻のタイトル。

三五歴紀　三世紀、中国・呉の徐整（じょ・せい／?～?）が編纂した神話集。天地ができる前は卵の中のように混沌としており、そこに誕生した「盤古」（Pángǔ）という巨神が一万八千年をかけて天地を押し広げたとする。

日本IT書紀　002 書紀

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。